

# ワールド・トレード・センター

2006(平成18)年10月8日鑑賞(敷島シネポップ)

★★★★



監督=オリバー・ストーン/出演=ニコラス・ケイジ/マイケル・ペーニャ/マリア・ベロ  
/マギー・ギレンホール/スティーブン・ドーフ/ジェイ・ヘルナンデス/アルマンド・リ  
スコ/ジョン・バーンサル/マイケル・シャノン (UIP 配給/2006年アメリカ映画/129分)

……『ユナイテッド93』に続く9・11同時多発テロを題材とした映画は、オリバー・ストーン監督には珍しく(?)ヒューマンな視点を徹底させたドキュメンタリータッチのもの……。主役は被害者の救助に大車輪の活躍をする警察官ではなく、逆に奇蹟的に救助された2人の実在の警察官。彼らの使命感と生き残ろうとする執念は一体どこから生まれてきたのか? それがこのテーマだが、今を生きる日本人として別の視点でこの映画を観れば、「教育再生」という安倍政権の課題のあり方も少しは見えてくるのでは……?

## 2つの9・11映画がつくられるまで……やはりアメリカは自由の国……

悪夢の9・11同時多発テロが起きたのは2001年。それから5年、アメリカでは『ユナイテッド93』とこの『ワールド・トレード・センター』という2つの9・11映画がつくられた。

しかし、そこに至るまでの道のりが平坦でなかったことは、パンフレットをはじめさまざまところで論じられている。それを逐一述べることはできないが、それに関連して私がここで指摘したいことが2つある。その1つは、アメリカはやはり自由の国だということ。これは当たり前のことだが、実はそれは何よりも重くすばらしいこと。

自由の国だからこそ、いつ、誰がどのようなアプローチでこの事件を映画で取り上げるのが国民の関心を集め、今回オリバー・ストーンというオスカー3度の受賞監督がこういうスタイルでの映画づくりで名乗りをあげたということだ。

## 大和魂とアメリカ人気質……

もう1つは、フロンティア精神あるいはヤンキー魂ともいうべきアメリカ人気質。ワールド・トレード・センターでの犠牲者は2749名だが、そのうち消防士は343名、港湾職員は84名（うち37名は警察官）、ニューヨーク市警の警官は23名とのこと。

この数字は WTC 北棟に続いて南棟に発生した航空機の激突という想像もつかないような事態の中、自己の命の危険を省みず、がむしゃらに生存者の救出に向かった警官、消防士、港湾職員たちがいたことを如実に物語るもの。

これは自分の仕事＝任務に対する責任感の現れだが、それを支えているのはフロンティア精神もしくはヤンキー魂ともいうべきアメリカ人気質……？

これは逆に言えば、武士道も大和魂も失ってしまった今の日本で、この9・11に匹敵するような惨劇が起こった場合、喜んで彼らのような行動をとる警官、消防士が本当にいるのかという私なりの問題意識なのだが……。

## 主人公は実在の2人の警察官

オリバー・ストーン監督が9・11事件を描くのに選んだ主人公は、ジョン・マクローリン（ニコラス・ケイジ）とウィル・ヒメノ（マイケル・ペーニャ）という実在の警察官。北棟へのアメリカン航空11便の、そして南棟へのユナイテッド航空175便の激突の後、被害者を救助するためジョンをリーダーとする計5名の港湾局警察官（PAPD）はビルの内部に突入したが、一瞬の轟音とともにたちまち瓦礫の下敷きとなり、アントニオ・ロドリゲス（アルマンド・リスコ）とクリス（ジョン・バーンサル）は死亡、ジョンとウィルは身動きできない状態になってしまった。

そして、幸運にも1人動ける状態だったドミニク・ペズーロ（ジェイ・ヘルナンデス）も、次の轟音を伴う崩壊によって犠牲に……。

この映画は瓦礫の下敷きとなった状態で生き延び、遂に救助されることになったこのジョンとウィルの2人の姿とその家族の姿を通して、あの9・11の悲劇とアメリカ国民の次への希望を描こうとするもの。

『プラトーン』(86年)、『7月4日に生まれて』(89年)、『JFK』(91年)によって、3度のアカデミー賞監督賞等を受賞したものの、最近の『アレキサンダー』(04年)は不評だったオリバー・ストーン監督が、絢爛豪華たる歴史大作とは全く異なるヒューマンな視点と事実と即した視点に徹して描いたこの映画の成否は……？

## それにしても日本の危機管理は……？

10月8日の中国訪問に続いて、9日に韓国を訪れた安倍総理の耳に入ったのは、北朝鮮が9日午前中に地下核実験を行ったという緊急情報。

アメリカの独立記念日に合わせたかのような7月4日のミサイル発射に続く北朝鮮の国際世論への挑戦だが、『ワールド・トレード・センター』を観た翌日にこのような事態になったおかげで、あらためて「それにしても日本の危機管理は」というテーマを考えるきっかけに……。

ミサイル発射の際の国連安全保障理事会への安倍官房長官(当時)プラス麻生外務大臣の働きかけに続き、今回の核実験について国連安全保障理事会に対して北朝鮮への制裁決議案を求める日本の働きかけは順調。

しかし、そんないわば事務レベルを超えた9・11同時多発テロと同程度の危機が日本を襲った場合の危機管理はホントに大丈夫なの……？

私は決して大丈夫とは思っていないのだが……？

## こんなしんどい演技ははじめて……？

この映画には特別なストーリー性があるわけではなく、オリバー・ストーン監督が描くのはジョンとウィルの救出に至るまでの生への執念と、それを支えた家族愛の姿。生への執念と言うのは簡単だが、瓦礫の下敷きとなり孤立無援で何の希望も見出せない中、苦痛と闘いながら生への執念を燃やすのは並大抵のことではないはず。

ジョンがウィルに対して「お前が死んだら、俺も死ぬ。いいな？」と言うのは情緒的な言葉ではなく、その顔面どおり、声をかけ続けてくれるウィルがいなくなればジョンはまちがいがなく朦朧とする意識の中で眠り込み、死亡していたはず

……。

俳優はさまざまな役柄に挑戦する仕事だが、やはりおいしい役柄とつらい役柄があるはず。すると、オリバー・ストーン監督がこの映画で2人に要求した役柄は、2人にとって多分最高につらい役柄……？ 瓦礫の下敷きとなり、粉塵まみれの中で目と口だけを開けてしゃべるのだから、演技の幅が狭められるのも俳優としてはしんどい話。

もっとも、そんな役柄にじっと耐えて完成した映画だからこそ、2人の熱演に拍手が送られるわけだが……。

### 思い出すのは……？

人間いよいよダメだという状況になって最後に伝えたい言葉は、妻や夫そして子供に対して「愛しているよ」ということになるのは『ユナイテッド93』を観ているとよくわかる。特別な人生を歩んだ人を除く(?)普通の人々(家庭人)なら、誰でもそうなるのが普通……。またそうだからこそ、そういう極限状態の中でスクリーンを通して伝えられるそんなメッセージに誰もが共感し、涙を流すことができるわけだ。

オリバー・ストーン監督が9・11テロを題材としたこの映画で描こうとしたのはジョンとウィルの生きる勇気と家族愛だから、瓦礫の下敷きとなって身動きがとれないジョンとウィルの2人が交わす言葉は互いの家族のこと。どちらかというところジョンよりもウィルの方がおしゃべり(?)であるうえ傷が浅い。したがって、ビル突入時のリーダーはジョンだったが、瓦礫の下での耐久レースにおける会話のリーダーはウィル……。その耐久レースの中で彼らが思い出すのは……？

### 真実にもとづく物語の限界も……

ジョンには妻ドナ(マリア・ベロ)との間に4人の子供がいる。4人目は上の3人とかなり離れて生まれてきた子だ。仕事に夢中となってきた自分の人生を振り返ると、さて自分はいい夫であり、父であったのかという思いがジョンの頭をよぎったのは当然……。？

他方、ウィルの妻アリソン（マギー・ギレンホール）は幼い子供を1人抱えた中で、今妊娠中。生まれてくる子供は女の子だとわかっているが、その名前をどうするかについて夫婦の見解が相違中……。

瓦礫の下で2人はそんなたわいもない会話をしながら、ともすれば眠ってしまいそうになる意識を持ちこたえているのだった。

オリバー・ストーン監督はそんなジョンとウィルのビル突入までの家族をめぐる人生模様をスクリーン上に示し、数時間前までの生活と現在の絶望的状况を対比させていく。

このジョンとウィルの家族の描き方の基本方針は、真実に即するという。それはそれでいいのだが、やはり現実に生き、現実に生活している人間のプライバシーをそのままスクリーン上に表現するのだから、そこには当然ある種の制約も……。

つまり、ジョンもウィルも立派な夫、立派な父として、妻や子供たちから尊敬されている存在だという「キレイ事」しか描けないという限界があるのでは……？ そのように私は思ってしまったが、それはあまりに意地悪く観すぎ……？

## カーンズとトーマスもアメリカ的……

映画の前半はジョンとウィルそしてその家族をめぐる物語に終始するが、後半からは新たに1人の特徴的な人物が登場する。それは三等曹長のデイブ・カーンズ（マイケル・シャノン）。

彼は当時会計士をしており、多くの人々と同じようにテレビでWTCの様子を見ていたのだが、神の啓示を受けたと感じたため、海兵隊員の姿となって、いわば勝手に現場に急いだというわけだ。いくら元海兵隊員だといっても、こんな勝手な救助活動は日本では到底考えられないが、アメリカではそして現場が混乱していた当時ではこういう事実が存在していたわけだ。

しかも驚くべきことに、カーンズが崩壊したWTCの中に入った時、既にそこではもう1人トーマスという海兵隊員がカーンズと同じ活動をやっていた。夜中に2人だけで懐中電灯を点けて回りながら、大声で「誰か生きている者はいない

か」と声をかけていくことの意味がどれだけあるのかわからないが、事実としてそれがジョンとウィルの耳に届いたのだから、それはまさに奇蹟であり、神の啓示という他ないのかもしれない。

こんな活動をするカーズやトーマスという人物がいたこと自体、いかにもアメリカ的……？

## 救出者20名という現実……？

カーズとトーマスは奇蹟的にジョンとウィルを発見したが、それはあくまで発見しただけで、瓦礫の中に埋まっている2人を引き出す作業は並大抵のことではない。したがって、真実に即した物語を目指すスクリーン上では、その後の救助の様子が詳しく描かれていく。

しかしそれは、ある意味結果がわかったうえでの「高みの見物」だから、観客としてはもうひとつ……？

この映画を鑑賞してわかったのは、ジョンとウィルは救助者の18番と19番であり、救助者は計20名だったということ。冒頭に掲げた犠牲者の数とわずか20名という救出者の数を対比して、どう考えればいいのだろうか……？ それはアメリカ国民の中に今も重くのしかかっているはず……。

そして、この映画を観た私たち日本人にとって大切なことは、「明日はわが身」という気持を持つことだし、それに備えた心構えをしておくことだ、と私は思うのだが……。

2006(平成18)年10月11日記